

12月15日「まっすぐに！」マラキ書3：19～24 ヨハネ福音書1：19～28

いよいよ、アドヴェントも第3週に入りました。今日は旧約聖書からはマラキ書の言葉を聞きました。「3章1節 見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。」

マラキ書は紀元前500年頃、イスラエルの人々がバビロン捕囚から帰還した頃に預言された言葉です。その時代、捕囚から帰還した人々は希望をもって、エルサレムの神殿を再建しました。けれども、ようやく夢に見た再建を果たしたにもかかわらず、ペルシアの支配は続き、周辺の民族からの攻撃も絶えない。生活は楽にはなりません。希望が失意と落胆に変わり、人々の信仰は冷めていきました。礼拝への関心も薄れ、異教の神への礼拝と混同されるようになり、正しい礼拝が何なのか分からなくなっていきます。社会も乱れ、嘘が蔓延し互いの信頼関係が崩れ、孤児・寡婦・寄留の民、社会の最も弱い立場にある者たちが奪われ、虐げられる(3章5節)そんな風になってしまいました。そんな時に名も無い預言者は告げました。

「19～20節 見よ、その日が来る／炉のように燃える日が。高慢な者、悪を行う者は／すべてわらのようになる。到来するその日は、と万軍の主は言われる。彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには／義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。あなたたちは牛舎の子牛のように／躍り出て跳び回る。」

救い主は必ずやって来る。その日は審判の日であり、悪事を働いた者たちには容赦ない裁きが下る。しかし、神の道を正しく歩む者には義の太陽が昇り、その光に包まれた者は癒され、救われるだろう、というのです。

そして、そのような裁きの前に、人々が正しい神の道へと立ち返るように神さまは使者を送られるというのです。それが先ほどの言葉です。「3章1節 見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。」そもそも、マラキというのは「わたしの使者」と言う意味で人の名前としては有り得ないヘブライ語です。マラキ書は神さまがやってくる裁きの日、主の日が来ること、その前にこの「使者」の存在を告げる預言書であるため、マラキ書とされています。

さて、マラキ書が伝える「使者」とは一体誰のことでしょうか？先ほど、ヨハネ福音書を読みましたね。そうです！洗礼者ヨハネのことを預言した言葉だと考えられているのです。だから今日読まれます。アドヴェント第3週はテーマが決まっています。救い主のために道備えをした洗礼者ヨハネに

ついて語られることになっているのです。

洗礼者ヨハネは彼自身も素晴らしい人で、荒れ野で質素な暮らしをしながら、多くの人達に社会の不正を伝え、悔い改めさせ、正しい道へと導きました。人々の間でも「彼こそが長年待ち望んだ救い主ではないのか？」と噂になりました。そこで、首都エルサレムの指導者たちは調査に乗り出します。彼らは人を遣ってヨハネに尋ねさせました。「あなたは、どなたですか」ヨハネは答えました「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」

ヨハネはどれほど、自身の働きが認められ、大勢の人が弟子になっても決して驕りませんでした。「その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」そうして人々に、神の愛と正しい道を説き、悔い改めの洗礼を授け、生き方すべてを通してイエスを証ししつづけました。私たちもこのヨハネの存在を忘れてはなりません。私たちはこれからクリスマスを迎えてキリストを祝おうとしています。普段よりは教会は注目を受け、人も集まるでしょう。でも勘違いしてはなりません。教会に人を集めるためにクリスマスがあるのではないのです。注目を浴びるから偉いではありません。私たちはそこで、ただただキリストを示していくのです。

昨日、愛光保育園の年長児のためのクリスマスが行われましたが、そこにやってきたサンタは変わったことを言うのです！「愛光保育園の皆さん、クリスマスはイエス様のことをお祝いする日ですよ。大切なことを忘れないでね！」こんなことを言うサンタはめったに居ませんが、そういうことなのです！その後、子どもたちが自然と「お祝いだ、イエスさまが〜♪」と歌い始めたことはびっくりしました。キリストを指し示す、それが教会の使命であり、キリスト者と言うのは生き方を通して、自分自身ではなく、背後にいて支えてくださるキリストを証ししていくものなのです。

今日のヨハネの言葉を聞きながら、私はある方を思わずにはおれませんでした。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」アフガニスタンの荒れ野に命の水をもたらした多くの人の命を救い、最後は凶弾に倒れた方です。そうです、中村哲医師です。私は恥ずかしながら彼の素晴らしい働きも、彼が福岡の西南学院中学出身のキリスト者であったことも知りませんでした。今回、報道や各関係キリスト教団体の声明を読んで初めて知りました。先日中村哲医師を追悼する NHK の特集を見て、涙が止まりませんでした。

ご存知ない方のために少し紹介しますと、中村哲さんはお医者さんで、1984年から、医師としてアフガニスタンとの隣接地であるパキスタン北西のペシャワールに派遣されました。そこで、ハンセン病を中心としたアフガニスタン難民の治療に携わります。以来、その地にいくつもの診療所を建て、医療者として従事してきました。ところが、2000年にアフガニスタンは100年に1度の**大旱魃**に見舞われます。さらには、9.11のテロが起り、アメリカ軍による空爆が始まります。旱魃に加えての紛争と内乱でアフガニスタンの国内では3人に2人の割合で簡単に子どもたちが死んでいってしまうそんな現状を見て、中村医師は遂に白衣を脱ぐ決意をします。「100の診療所より1本の水路だ！」子どもたちが死んでいく原因のほとんどは栄養失調と不衛生な環境だったのです。水路を通し、綺麗な水を使えるようになることで、農業を復活させ、衛生的に過ごせるようにする、それが100人の医者連れてくるより必要なことであると、中村医師は考えたのです。

中村医師の働きの大きさを知るのには言葉よりも、2枚の写真を見ることです。1枚目は2007年の写真で、大旱魃によって荒廃し、石と砂だけとなってしまった大地です。2枚目はそれからたった2年後、2009年の写真。1本の水路を通すことで、田畑が復活し、人々が生活を営めるようになったのです。中村氏の造った水路によって生まれた緑が復活した土地は1万6500ヘクタール。およそ60万人の難民が故郷に帰り、生活できるようになったのだそうです。

私は中村医師は本当のキリスト者だと思いました。本当のキリスト者というのは、聖書の言葉を本物にして、生きる人のことです。そうしてイエスを示しながら生きる人のことです。NHKの特集「武器ではなく命の水を」では、テロ組織に入隊していた者と、アメリカ軍の傭兵として戦っていた者たちがお互いにクワをとりあつて、故郷に緑を取り戻すために働く姿が映し出されていました。そしてその上空を武装ヘリが飛んでいきます。「武器を取る者は取れ、私たちはクワで平和を実現しよう！」とは中村医師の言葉ですが、思わず預言者イザヤの平和の言葉を思い出します。「イザヤ2:4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」

洗礼者ヨハネは荒れ野で「主の道をまっすぐにせよ！」と叫びました。中村医師も、アフガニスタンの荒野で、私たちの世界に溢れる欺瞞と偽り

を糾弾します。中村氏の言葉です。「アフガニスタンでの事業をおこなうことによって、少なくとも私は世界中を席卷している迷信から自由でいられるのです。世界中の人がとらわれている、その迷信とはなんでしょうか。それは、一つには、お金さえあれば幸せになれる、経済さえ豊かであれば幸せになれる、というものです。」

「もう一つは、武力があれば、軍事力があれば、自分の身を守れるという迷信です。武力が安全をもたらすものかどうか、丸腰でおこなう用水路建設での私たちの経験が教えてくれます。このような実体験によって、私たちは、幸いにもこの強力な迷信から自由です。」

私たちは主の降誕を待っています。この時期に考えます。私たち自身のあり方が変わらなければ、キリストとサンタクロースとはあまり変わりがありません。イエスは私たちに「いのち」をもたらすためにやってきました。奪われることのない永遠のいのち、それは愛です。私たちが囚われているあらゆること、国や、民族や、宗教や、性別やあらゆる、壁を乗り越えて、愛することを教えてくれた。中村哲さんは、まさにキリストをその生き方で示しながら生きられたと思う。中村医師も最期には銃弾に倒れて、イエスと同じようにご自分のいのちを献げられたが、その命は決して彼個人のものだけでは終わらないだろう。意志を継ぐ者がアフガニスタンにも日本にも居るのだから。

**ヨハネ12:24「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」**

私たちがそうありたい。自分達が栄光を受けるためではなく、キリストに栄光があるような生き方をしたい。